

70号

愛鳥教育

2004.4



全国愛鳥教育研究会

愛鳥教育 No.70 2004.4

目 次

第4回	書評
環境教育研修会 in YOKOHAMA	森の野鳥を楽しむ
報告-----堤 達俊 3	101のヒント-----桐原(森)真希 24
ドングリキンクロ-----巢山香里 11	お知らせ
もりまき通信20)	電子メールによる
帰化生物との原体験-----桐原(森)真希 14	ニュースレター配信について-----25
文明の果てる時-----箕輪多津男 16	ご案内
朱鷺だより-----箕輪多津男 19	第5回
染谷優児	環境教育研修会 in YOKOHAMA -----26
書評	平成14年度収支決算報告-----27
アオバトのふしぎ-----箕輪多津男 22	編集後記-----27
染谷優児	

研修会報告

第4回 環境教育研修会 in YOKOHAMA

～小学校教職員のためのバードウォッチング講座～

「人と野鳥との関わりを考える」 報告

常務理事 堤 達俊

1. はじめに

4回目となった環境教育研修会 in YOKOHAMA であるが、今回は、「人と野鳥との関係を考える」をテーマに行った。特に「餌付けについて深く考える」ことを、今回の主な目的に設定した。

場所は、横浜市鶴見区にある「神奈川県立三ツ池公園」。この公園は、「都市のオアシス」を目的として整備されており、名前の通り、三つの池を中心に、テニスコートや野球場、プールといったスポーツ施設もある。神奈川県選定の「かながわの探鳥地50選」にも選ばれている。

また、「誰もがゆったり安らげる場所づくり」を公園づくりの指針の一つに挙げているように、この公園には年間を通して多くの人々が訪れる。来園者の中には、パンやポップコーンなどを、池に来る水鳥に餌として与える人が少なくない。そこで、研修会の開催地として、今回のテーマに適した場所だと考えた。

2. 餌付けをする人の気持ちを考えよう。

◇餌付けをする人の気持ちを予想してみる

まず最初に、参加者に、三ツ池公園に来園した親子がカモに餌を与えている場面の写真(研修会テキスト p5、本文 p8 参照)を見せ、餌を与えている子どもの気持ちを予想してもらった。

その上で、本当にそのような気持ちになるのか、実際に餌付けをすることにした。

その際、自分がこの公園に来た子どもになったようなつもりで餌付けをするよう、声をかけた。

また、餌は研修会のためとはいえ、必要以上に水質を悪化させないように、パンの耳を必要最小限(一人1本)使用することとどめた。

餌を与える対象は、三ツ池公園での水鳥の大半を占めるキンクロハジロ、ホシハジロ、ユリカモメである。

◇餌付けをする人の気持ちを追体験してみる

参加者を二つのグループに分け、一つのグループを餌を与える役とした。残りのグループは単なる来園者という立場から、給餌をする様子を見て、どんなふうを感じるか、考えるようにした。

ある程度時間を取った後、途中で役割を交代し、全員がそれぞれの役割を経験するようにした。

その上で、参加者に餌付けした時、自分がどのようなことを思ったか聞いてみた。「おもしろい。」「食べて食べて。」「自分が投げた餌を食べてくれてうれしかった。」「かわいいな。」「いっぱいおいで。」「もっと寄ってきてね。」「寄ってきてくれるのでおもしろい。」「もっとあげたい



な。」などの感想が出された。餌付けを通して、表面的ではあるが、野鳥への関心が高まったと言える。

3. 餌付けは、他の人にどのような影響を与えるか。

一方、その餌付けの様子を見ている側はどんな気持ちになったのだろうか。餌付けを見ている役となった半数の参加者に聞いてみた。

すると、「いっばい来た!」「いいな、わたしもやりたいな。」「餌を持ってくればよかった。」というような声が聞かれた。

このことから、公園のような多くの市民が訪れる場所での餌付けは、他の人の餌付けの意欲を高めることがわかる。つまり、誰かが餌付けをしていると、その行為が広がっていくということである。

4. 餌付けに対する野鳥の反応はどうか。

次に、再びパンの耳1本をカモに与えてもらうことにした。このときの視点は、餌を与える前と与えた後での野鳥の動きの違いである。

餌となるパンを投げると、すぐに多くのキンクロハジロが集まってきた。その他、ホシハジロ、ユリカモメ、ドバト、ヒヨドリなども参加者の与えるパンに寄ってきた。

参加者からは、「素早く動いている。」「餌をよく見ている。」「極端に近くへは寄ってこない。」「カモ同士がケンカをしている。」などという声が聞かれた。

5. 餌付けをどうとらえるか。

以上のような活動を終えた後、餌付けについて次のようにまとめた。

餌付けの効果は、単発的なものだけでなく、長期にわたるものもある。特に、長期的な餌やりをすることによって、野鳥はそのことに慣れていく。

三ツ池公園の様子を見てもわかるように、多くの人やってくる公園では、入れ替わり立ち替わりいろいろな人が餌やりを行っている。公園に来る人は、一回限りの餌やりのつもりかもしれないが、これは野鳥にとっては、餌を与えられ続けていることと同じで、「餌付け」と同じことになる。

そこで、参加者の意見も参考にしながら、餌付けの長所・短所について分けて次のようにまとめてみた。

[人にとっての餌付けの長所・短所]

【長所】

- 野鳥に関心を持つきっかけとなる。
- 野鳥をかわいがろうという気持ちを持つきっかけとなる。
- 周りの人にも、野鳥や餌付けへの関心を持たせることができる。
- ※ 情緒面への効果が高いと言える。

【短所】

- △直接的な短所はないように思える。
- ※ しかし、「かわいい」「おもしろい」ということについては、『野鳥そのものへの関心』というよりも、『自分が与えた餌を食べてくれることに対する興味の高まり』とも言える。その違いを、指導者はしっかりと認識する必要がある。

[野鳥にとっての餌付けの長所・短所]

【長所】

- 餌をもらうことによって、食べ物に不自由しない。

【短所】

- △自然の餌とは違う餌を与えられる。→栄養偏向→寿命が短くなる可能性がある。
- △餌のやりすぎによって水質の悪化が起きる。→他の生物へも悪影響が及ぶ。
- △自然の中では起きない行動の変化が起きてしまう。→高密度な異常な集団が構成されることで、他の種との交雑が起きやすくなるという指摘もある。
- △餌を与えようとした対象以外の野鳥も集まってきてしまい、多くの野鳥の行動も変えてしまう。
- △野鳥は自然の中で自分で餌を採ることにより、生態系での役割を果たすことができる。餌を与えるということは、生態系を寸断してしまうことになる。野鳥はペットではない。

当日も参加して下さった「三ツ池公園を活用する会」の松田照之氏からは、

「以前はこれほどカモが多くいなかったが、徐々に増えてきた。また、ユリカモメも以前はいなかった。近くの菊名池では、10年ほど前までは、夜になると、カモが餌を求めて飛び立っていった。しかし、最近では、夜もずっと池にいる。採餌だけでなく排泄も同じ場所で行うことでの水質や生態系への影響といったことも考えられる。これらの野鳥の行動や様子の変化の背景には、餌付けの影響があるのではないかと思われる。」

という貴重なお話をうかがうことができた。



[その他の例]

カメラマンがカワセミの捕食シーンを撮ろうと餌付けをした際のこと。バケツに入った魚を捕ろうとしたカワセミの嘴がバケツの底に当たり欠けてしまったという事故が報告されている。

以上のように、餌付けには長所短所が混在しているので、単純に、よいこと、悪いことのいずれかであると決めつけることはできない。また、問題点の中には、自然だけでなく他の人々への影響もあることに注意を払うべきであろう。

特に、たくさんの人々の集まる場所や場面では、その場の興味だけで餌やりをすることが、結果的に大量の餌を継続的に与えることにつながりかねないということである。

学校などでは、遠足の際など、特に気をつける必要がある。

6. 同じ視点から餌台・巣箱・ビオトープについて考えてみる。

例えば、総合的な学習などで餌台作りを行うといった場合、「餌台は、少量の餌を与えて子どもの興味関心を高めるための手段として、冬季に限定して設置する。」というように、目的を明確にした上で実施することが大切である。

また、巣箱かけについても同様である。巣箱を利用する野鳥は全体の約5パーセントに過ぎない。過度な巣箱かけは、一部の野鳥のみの繁殖を助けることになり、生態系への影響が懸念される。一方、野鳥への関心を高める効果は十分に認められる。よって、巣箱かけを行う場合は、設置場所・数などに十分な配慮が必要である。

ビオトープについてもしかりである。例えば、都市における学校ビオトープのように点在している池は、飛ぶ力の弱いイトトンボ類にとっては利用しづらい。したがって、飛ぶ力の強いトンボ類のみの繁殖を助けてしまう可能性がある。

また、生態系を意識した利用をしたい。トンボを守るためにビオトープに網を張ったり、野鳥を追い払ったりしては、ビオトープの本来の目的からはずれてしまうと思われる。

7. 研修会を終えて

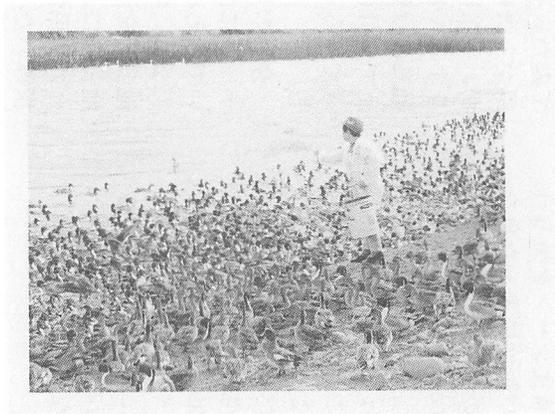
今回の研修会では、普通の自然観察会ではほとんど行われることのない餌付けを実際に行ってみた。それは、餌付けを単に悪い行為として頭から決めつけるのではなく、指導者である教師が、実際に餌付けをすることによって、餌付けをする人の気持ち・それを見ている人の気持ち・野鳥の行動の変化などを体験的にとらえ、その上で餌付けについて改めて多面的に且つ深く考えてみるということがとても大切だと考えたからである。

今回の研修会が、単に餌付けにとどまらず、テーマに設定した「野鳥と人との関わり」について考えるきっかけとなれば幸いである。

なお、今回の研修会開催に当たっては、「三ツ池公園を活用する会」の松田照之氏から、三ツ池公園における野鳥の様子やその変化、餌付けとの関係性などについて、詳しく且つ親しくご指導いただいた。改めて厚く御礼を申し上げる次第である。

第4回 環境教育研修会 in YOKOHAMA

～小学校教職員のためのバードウォッチング講座～
「人と野鳥との関わりを考える」



- ◎日 時 平成16年1月24日(土) 10:00～12:00
(雨天時は翌日に延期)
- ◎会 場 県立三ツ池公園(横浜市鶴見区)
- ◎参 加 費 500円(資料代・保険料等)
- ◎主 催 全国愛鳥教育研究会

1 カモウォッチングは小学生に最適!

◎ なぜ、カモウォッチングが小学生向きなのか?

[だって1] カモは大きくて、動きが素早い!

[だって2] カモの種類は少ない!(三ツ池公園ならわずか5種類!?)

[だって3] カモは木の中に隠れない!

[だって4] カモはほとんどが渡り鳥!

[だって5] 横浜の小学校は川・海的环境下に恵まれている!

だから・・・小学生でも観察しやすい!

総合的な時間で扱いやすい!

2 双眼鏡・望遠鏡の使い方を知ろう！

◎ めがねをかけている子とかけていない子の二つのグループに分けよう

[双眼鏡]

・ 7～10倍・広視界・ハイアイポイントが扱いやすい。

・ 対物レンズが大きい物は明るいが、子どもには重すぎる。

・ メガネをかけている子にはアイキャップを折るようにする。

・ アイマスクのように見えてはダメ。視野が丸くなるように。

・ 左右の視力の違いを補正しよう。

[望遠鏡]

・ パン棒から手を離す時は、必ずストッパーを締めてから。

用具を正しく扱って楽しいバードウォッチングを

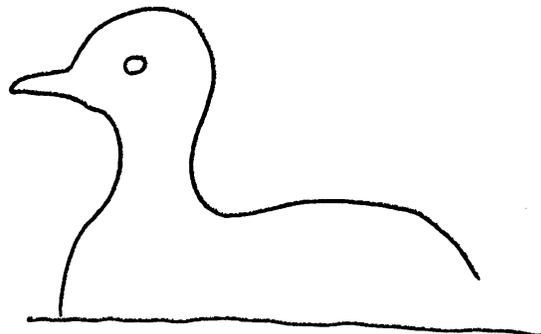
3 伝授！カモを見分けるコツ ～カモをパーツに分けよ～

◎ 「先生、あれ、なんていう鳥？」 子どもは、まず、そこから始まる

・ 名前を教えるのではなく、見分け方を教えよう。

[パズルを使って]

[カモモニタージュ]



・ メスは難易度が高い。まずは派手な色彩のオスから導入。

・ 図鑑よりも野鳥シート！種類も少なく、一度に見ることができ、下じきにもなる！

まず、カモの体をパーツごとに観察しよう！

4 餌付けをしている人を観察しよう

○餌付けをしている人の気持ちを考えてみましょう。



A large, empty speech bubble shape with a tail pointing towards the top left, intended for writing observations or thoughts about the people in the photograph.

5 やってみよう！餌付け体験！ ～人の気持ち編～

○子どもの気持ちになって実際に餌付けをしてみましょう。

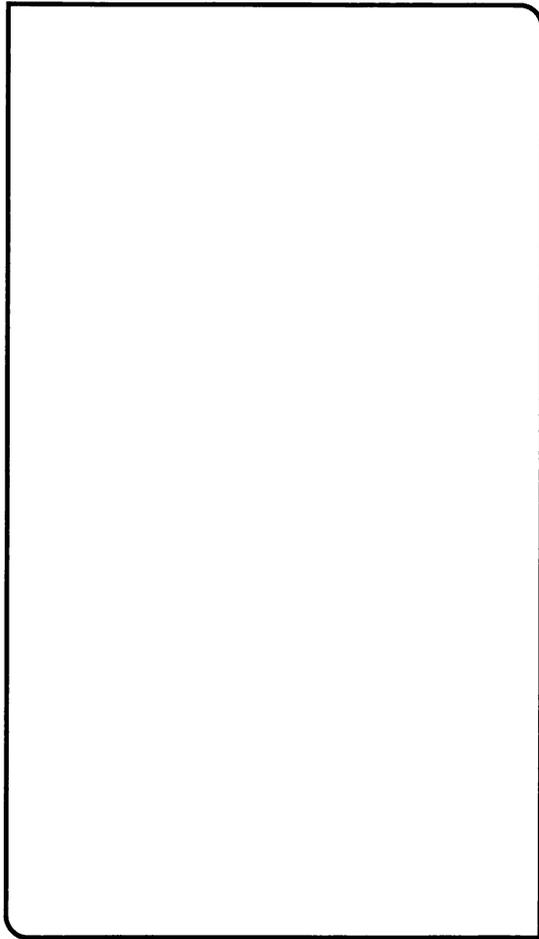
A large, empty rectangular box with rounded corners, intended for drawing or writing about the experience of feeding the birds from the child's perspective.

○餌付けをしている人を見て、どんな気持ちになりましたか。

A large, empty rectangular box with rounded corners, intended for drawing or writing about the feelings of the people feeding the birds.

6 やってみよう！餌付け体験！ ～野鳥の行動編～

○今度は、野鳥の行動に目を向けて餌付けをしてみましょう。



7 で、どうする？「餌付け」



人

野鳥



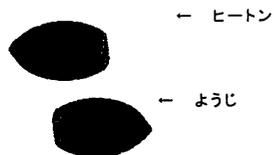
ドングリキンクロの作り方

材料・用具

- ・マテバシイの実2個 ・ようじ ・アクリル絵の具(黒・白・黄)
- ・木工用ボンド ・ヒートン(小) ・黒いひも
- ・ニス(マニキュアのトップコート)
- ・彩色筆 ・きり

作り方

- 1 マテバシイの実にきりで穴をあける。
- 2 ようじを短くきり、木工用ボンドを付け、2個のマテバシイを連結させる。
- 3 頭になる部分にヒートンをねじ込む。



- 4 アクリル絵の具で色を塗る。
- 5 乾かす。
- 6 黒いひもを短くきり、冠羽を木工用ボンドで付ける。
- 7 乾いたらニスを塗る。



できあがり

ドングリキンクロ

横浜市立神橋小学校 巢山香里

秋にはクラスの子どもたちと一緒に秋の宝物を使ってクラフトを楽しみます。中でも初秋の時期にたくさん落ちてくるマテバシイの実は、大きく、形も良く、時間が経ってもそのままの形を維持するので、時期を逃さないよう近くの公園に拾いに行きます。人間だけの財産ではないと思いつつも、整備された公園ではたくさん拾って帰ります。

そんな中、思いついたのが「ドングリキンクロ」です。冬の身近なカモであるキンクロハジロをドングリで作ってみました。

材料と用具



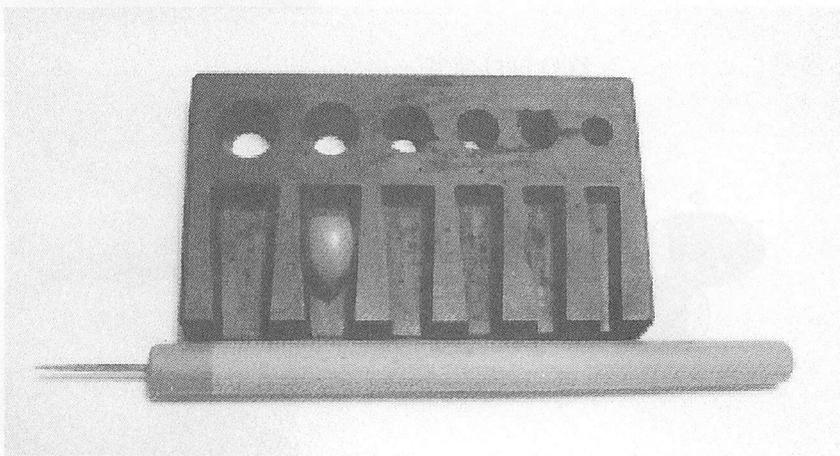
材料

- ・ ドングリ（マテバシイの実） 2 個
- ・ ようじ 1 本
- ・ 木工用ボンド
- ・ アクリル絵の具（黒・黄・白）
- ・ ニス
- ・ ヒートン（小）
- ・ 黒いひもまたは毛糸（冠羽用）
- ・ ひも

用具

- あれば・・・
- ・ ドングリの穴あけセット
- なければ・・・
- ・ きり
- ・ 粘土（固定のため）
- ・ 画筆

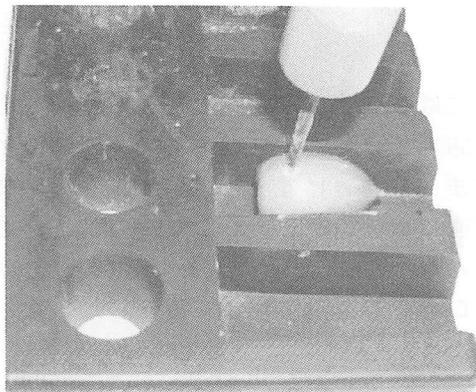
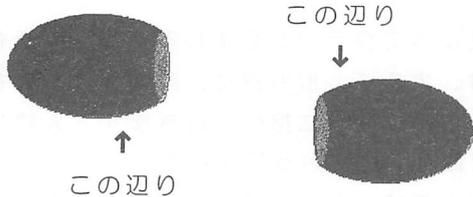
☆ドングリの穴あけセットは、生活科の教材カタログに載っています。
なければ、粘土でドングリを固定して穴をあけるとよいと思います。



作り方



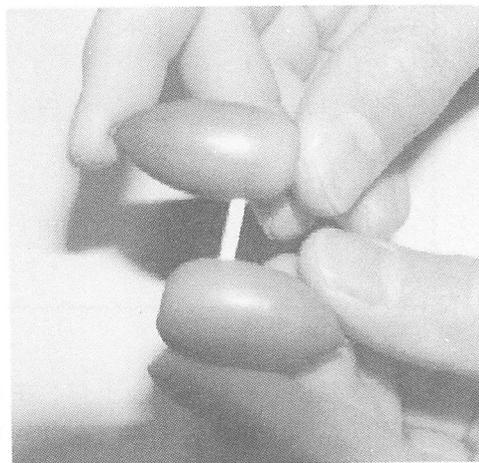
- 1 ドングリの実に穴をあけます。



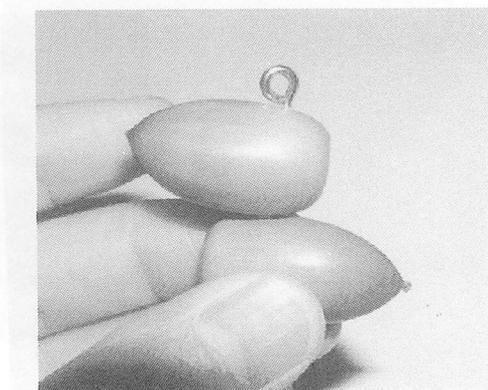
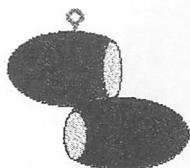
- 2 ようじを1 cm位に切ります。



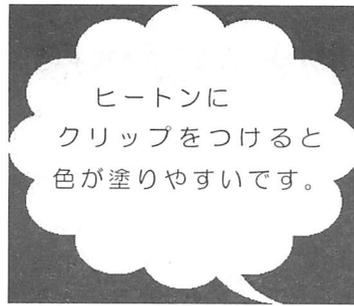
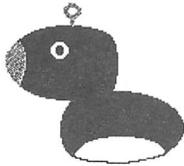
- 3 ようじに木工用ボンドをつけ、
1であけた穴に差し込み、
二つのドングリを連結させます。



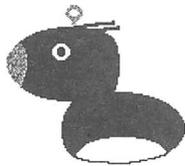
- 4 頭になる部分にヒートンを取り付けます。



5 色付けをします。

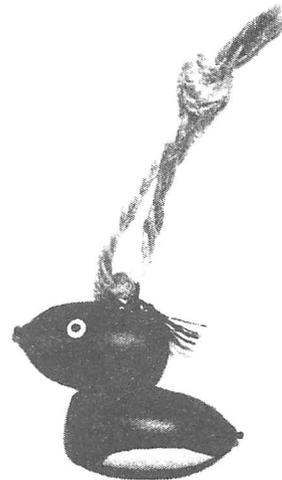
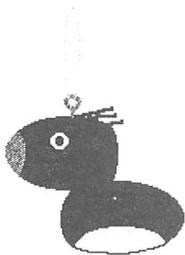


6 ボンドで冠羽をつけます。



7 ニスを塗って、乾かします。

8 ひもを付けたらできあがり。



ひとこと



☆新しいドングリを使うと、うまく作ることができます。時間が経つと水分が蒸発して堅くなってしまい、穴開けなどの加工がしにくくなります。

☆ドングリの中にシギゾウムシの幼虫が入り込んでいることがあります。ドングリの殻は固いので、生のままでも幼虫は出てきませんが、気になるようであれば、

- (1) 拾ってきたらすぐに湯がく。
 - (2) 破裂しない程度に電子レンジにかける。
- などすれば良いと思います。

もりまき通信(20)

帰化生物との原体験

自然観察指導員 桐原(森) 真希

●佐賀市の田園で

幼稚園の年長から小学校生活の6年間、この期間を私は、九州は佐賀県佐賀市の田園地帯で過ごした。今や3才の娘と7ヶ月になる息子を持つ母親になっている私は、今年で31才になるのだが、もう25年も前のことであるのかと思うと愕然とする。しかし、その佐賀市での幼少時代の自然体験は、今の私につながる貴重なものであったのだと思い返されるだけでなく、昨今の帰化生物の状況について考えるきっかけともなっているのである。

●遊び相手の出身地は

オオイヌノフグリが可愛い水色の花を咲かせると、春が来た!とウキウキし、田んぼに一面に広がるレンゲソウで髪飾りを作り、シロツメクサで首飾りを編んだりしたものだ。市内を縦横に走る水路にはオオカナダモが茂っていたが、男の子に混じって水に入っては、網やザルを使い、追い込み漁の要領で小魚などを捕まえた。そうして喜んで持ち帰ったものは、タイリクバラタナゴにカダヤシ、そしてアメリカザリガニ。薄気味悪く響いていたウシガエルの鳴き声は、地元の夏の風物詩だった。

なんて自然豊かな環境だろう、と一読された方は感じられるかもしれないが、実は、ここに登場している生き物は、全て外来種、帰化生物なのである。

オオイヌノフグリは、明治時代の中頃に発見されたユーラシア、アフリカ原産のゴマノハグサ科の植物。

レンゲソウの標準和名はゲンゲ。一般にはレンゲあるいはレンゲソウで親しまれている。中国原産のマメ科植物で、水田の緑肥として栽培されたもの。

シロツメクサは、ヨーロッパ原産のマメ科植物で、牧草としても世界中に広がっている。別

名クローバー。

オオカナダモは、大正時代に渡来したアルゼンチン原産の水草で、関東より西で帰化している。

タイリクバラタナゴは、中国の揚子江水系を中心とするアジア大陸東部原産のコイ科の小魚で、体高が高く、ひし形に近い体つきに、美しく光る青色の鱗と濃い桃色がかった婚因色が印象的な淡水魚である。

カダヤシは、北米東南部原産で、1916年にボウフラ駆除のために台湾経由で持ち込まれたらしい。幼かった当時はメダカと信じ込んでいたが、背中に黒い線がなかったように記憶しているので、カダヤシを捕まえていたものと思われる。

アメリカザリガニは、名前の通りアメリカの南部の湿地帯に生息する。1920～1930年あたりから数回にわたって持ち込まれ、ペットや食用のものが逃げ出し広がったとか。すでに世界各国で確認され、オーストラリアと南極を除く四大陸と日本全土を制覇しているらしい。

ウシガエルは、アメリカ原産で、日本には1918年に初めて輸入されたが、第2次大戦から戦後にかけての養殖ブームや、各県での放流や脱出とにより、全国に野生化した。

●帰化生物って?

帰化生物は、外来種とも呼ばれる。英語で「alien species」と表記する。定義としては「自然分布域外に人の手によって運ばれ、野生化し、繁殖するようになった生物」とされている。

生物が移動させられる背景には、国の情勢や、文明、文化、時代の嗜好などなど、社会的、経済的、文化的な要素が大きく関連している。

●今の子供達が触れる自然は…

私の子供時代でさえ、生き物がたくさんいた環境だったとは言え、多くの外来種に囲まれて遊んでいたことになる。当時の私に帰化生物という認識は全くなく、日本の生き物として接していたのだ。果たして、今の子供達はどんな生き物に接しているのだろうか。

こんな疑問を持つ前に、一世代分の時間が経過した昨今、田畑や小川で生き物を見つけて採って、遊んで観察して、ということが出来る場所そのものが激減している。帰化生物の中にも、その後の環境の変化で、以前は普通にいたものが、見られなくなりつつある種もあるとか。

2002年に地人書館から発行された「外来種ハンドブック」から読み取ってみると、護岸された川や池では、カメがいたとはしゃぐ子供の視線の先には大きなミシシッピーアカミミガメが甲羅干しをし、魚が釣れたと歓喜する声の方を見るとオオクチバス（ブラックバス）が釣り上げられ、数少ない雑木林で樹液の出る木を見に行くと外国産のクワガタが黒光りしていたり、という塩梅かもしれない。

●奥深く難しい外来種問題

帰化生物の反対の立場の「日本在来種」といわれている動植物は、数万年から数十万年、あるいはそれ以上の長い年月をかけて日本列島の自然環境に適応してきた野生生物である。私自身、鳥や植物を観察していて、地球上で日本にしか生息していない種などに出会えたりすると、愛国心に似たような嬉しさを感じることもある。

特に草本類は、人工的な環境であるほど帰化植物の割合が高いと言われている。日本在来の植物がどれだけあるかは、その環境を評価する重要なポイントにもなるのだ。

しかし、単に外来種、帰化生物と言っても、その中にさらに区分がある。最近、特に問題になっているのは、「侵略的外来種」である。その定義は「外来種のうち、導入もしくは拡散した場合、生物多様性を脅かす種」とある。(財)日本自然保護協会の会報「自然保護」2004年3・4月号の特集では、10種の外来種があげられ、マングースやアライグマ、ブラックバス、外来大型甲虫などが詳しく紹介されている。

既に、国内では数千種の帰化生物が確認され、大きな問題を引き起こしている種から、完全に

日本の自然に溶け込み、老舗の顔をしているものまで、様々である。

●日本の自然遺産に愛着を

世界的に生物多様性に対する意識が高まっている中、日本は移入生物の「無法地帯」と言われている。生態系への影響が考慮されないまま、様々な理由で生物が移入・導入され、管理不足の上、無防備であるという。

日本列島の自然環境は、マダガスカルやガラパゴスと同レベルと言って良いほど貴重な財産であるという話を聞いたことがある。これから、生き物に出会ったり、触れ合ったりした時、「あなたの出身は？」ということに気にとめることで、今の日本の環境についての見え方や理解の仕方が深まるきっかけになるかもしれない。

《参考文献》

「スズメもモンシロチョウも外国からやって来た～帰化動物と日本の自然～」発行：PHP研究所、著者：中村一恵

「外来種ハンドブック」発行：地人書館、編集：日本生態学会、監修：村上興正、鷺谷いづみ

「自然保護、2004年3・4月号」発行：(財)日本自然保護協会

文明の果てる時

～遺跡のもう一つの意味～

事務局 箕 輪 多津男

世界には、これまで人類が築いてきた様々な文明の証しとも言える多くの遺跡が存在し、過去の足跡を今に伝えている。特にそこにたたく建造物などは、その当時の叡知と最高技術の結晶とも言えるべきものが多く、見るものに大きな感動を与えてくれる。いったいどれほど多くの人々がその建設に携わったのか、そしてその周りにはどれほどの人々が生活し、繁栄をきわめたのか、想像するだけでも心が躍る。悠久の時を超えた歴史の遺産と、現代に残されたことの奇跡、その前にたたくことができた瞬間には、不思議な感慨に包まれるものである。

もちろん、そうした遺跡は発掘された時からそのような姿であったわけではなく、ほとんどの場合、偶然の発見と膨大な修復作業、そしてその後の地道な維持管理によって現在の姿をとどめている訳であり、そこにもう一つの奇跡が存在していることになる。遺跡から受ける他では味わえないような感動には、そういった背景も大きな要因となっているに違いない。

しかしながら、である。そこで立ち止まって、改めて遺跡の周りの風景を眺めてみると、いったいどうであろうか。そこには乾いた砂漠や瓦礫に埋もれた大地、あるいは荒寥とした草原などがはるかに続いていたりする。豊かな生態系を宿す恵まれた自然環境とはおよそ正反対の、ある面、見る影もないような状況に今更ながら愕然とするわけである。

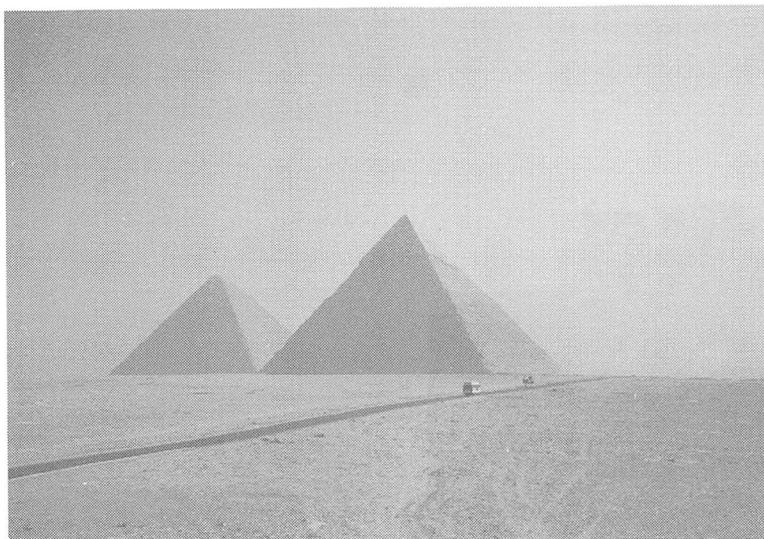
おそらく、繁栄を極めていた当時は、どこも豊かな自然に囲まれ、農作物、燃料、建築材等々、およそ自然から受けられる恵みに溢れていたことと想像される。だが、都市が成立し、人々が街にあふれ、そして次々と開発が進む中で、やがて豊かな自然は失われて行き、最後にはそこに展開していた文明もろとも滅んでしまったのではないだろうか。雑駁で少々乱暴な言い方も知れないが、文明の果てる時というのは、即

ち周りの豊かな自然が果てる時と言えなくはないだろうか。

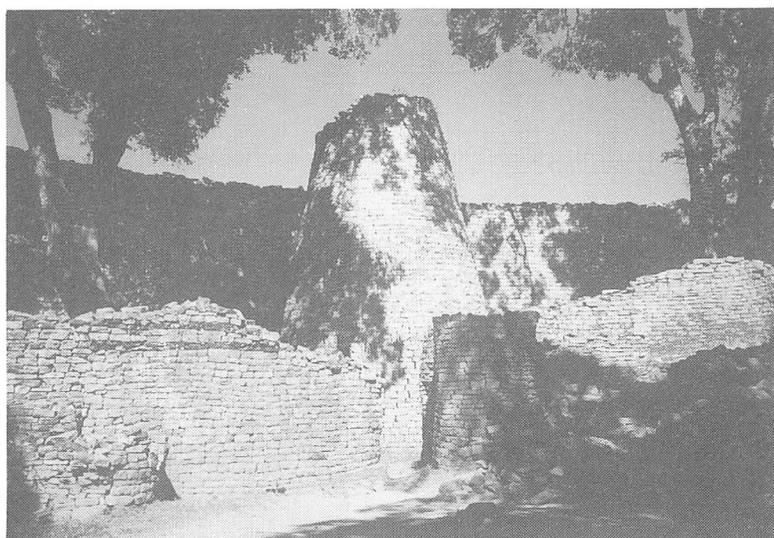
遺跡から受ける感動と同時に催す寂寥感というのは、実はそこで失われた自然環境への郷愁から来るものなのかもしれない。現場に立って想像されるのは、あくまで過去の繁栄であり、もはや荒れ果ててしまった同じ土地に、再び豊かな町や村が蘇るということは、少なくとも今の段階では望むことすら難しいであろう。

従って何が重要なのかと言えば、ずばり、自然環境を末長く保全していくことこそが、今ある町や村、人々の生活、そしてそれらを総体として見た時の文明の脈を、永々と繁栄させていくための基盤となるということなのである。人類の未来は、やはりかけがえのない豊かな生態系に恵まれた自然環境なしにはあり得ないものなのであろう。だからこそ、自然保護や愛鳥教育、あるいは環境教育というものが今後ますます不可欠なものになってくるに違いないのである。

遺跡の周りの荒寥とした大地から受けるもの、それは人類の将来に向けた大いなる警鐘であり、あらゆる人々の歩みに対する戒めなのである。



エジプトのピラミッド



石積みによって築かれた
大ジンバブエ遺跡



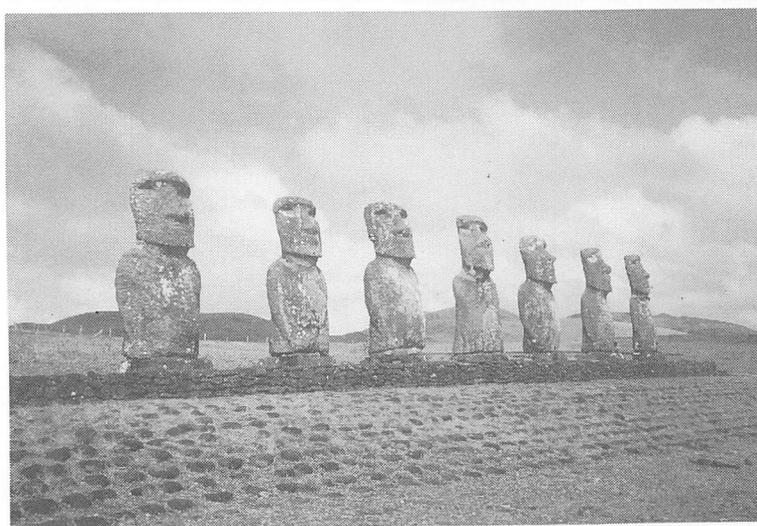
メルブの遺跡
(トルクメニスタン)



ペルセポリスの遺跡
(イラン)



パルミラの遺跡 (シリア)



チリ・イースター島
(ラパヌイ)のモアイ像

朱鷺だより

事務局 箕輪 多津男
副会長 染 谷 優 児

本会顧問の村本義雄氏から、朱鷺に関する情報をお寄せいただきました。

長年にわたる村本氏のトキに関する活動が、ついに県を動かしたとも言える新たな展開です。今後の動きから目が離せなくなりました。

また、村本氏は、長年、愛鳥教育の必要性を訴え、邑知潟をはじめとする自然環境の保護と共

に、子供たちへの指導を継続されてきました。今以て、それを実践し続けていってほしいです。愛鳥教育の原点を見る思いがします。

また、今般のトリインフルエンザの事態を考慮して、環境省も朱鷺飼育について新たな取り組みについて発表を行いました。野生復帰に向けての新たな進展と見てよいでしょう。

県、トキ飼育名乗り

06年にもいしかわ動物園

環境省 分散飼育認める

谷本正憲知事は五日、二〇〇四（平成十六）年の年頭会見で、特別天然記念物トキの石川県内での飼育を目指す意向を明らかにした。新年度に受け入れ条件の調査に乗り出す。辰口町のいしかわ動物園での飼育を想定し、中国陝西省洋県への実情視察、新潟県佐渡島のトキ保護センターとの技術交流などを実施する。実現すれば、〇六年にも県内でトキが羽ばたく姿がよみがえる。

環境省が昨年十二月に「トキの分散飼育を認める方針に転換したことに伴うもので、谷本知事は受け入れ先の指定を働きかけ、トキ保護センターが生息した地で、分散飼育を受け入れる資格がある」と述べた。

トキは現在、佐渡トキ保護センターのみ飼育されている。昨年未だ三十九羽に増え、分散飼育の受け入れが実現



年頭会見に臨む谷本知事
5日午前10時10分、県庁

「トキは現在、佐渡トキ保護センターのみ飼育されている。昨年未だ三十九羽に増え、分散飼育の受け入れが実現

2004年（平成16年）
1月5日（月）
発行所 北國新聞社

知事年頭会見

カモやハクチョウ

初めて近くで見た

羽咋・邑知潟で園児

羽咋市ちびっ子自然セン 十六人を招いて野鳥観察を
ターは八日、市内の園児五 行った。子供たちは、北帰



村本さん講師に観察会

ハクチョウやカモなどの野鳥を観察する
園児
羽咋市東潟の白鳥の里

行に向けて邑知潟や周辺の
水田で英気を養うコハクチ
ヨウやカモを間近にして、
自然を守る心をはぐくん

だ。
観察会は、環境学習の一環として、全国愛鳥教育研究会顧問の村本義雄さんを講師に招いて十年前から開かれていた。この日は羽咋幼稚園と羽咋白百合幼稚園の園児が参加した。
観察に先立ち、村本さんがトキの模型やカモのぬいぐるみで特徴や鳴き声を分かりやすく紹介。「昔、近くでトキが飛んでいました。皆さんが大人になった時、また見られるかもしれない」と話した。
園児らは邑知潟に移動し、水辺にたたずむハクチヨウやカモなどに歓声を上げ、望遠鏡をのぞき込んだ。羽咋白百合幼稚園の谷口朱里ちゃん(六)は「初めて近くで見た。きれいだっ」と目を輝かせた。

▲平成 16 (2004) 年 3 月 9 日北國新聞

平成 16 (2004) 年 5 月 2 日サンケイ新聞

野生のトキを再び

巨大施設で 餌捕り、営巣訓練

国の特別天然記念物で国際保護鳥のトキの野生復帰に向け、環境省は、巨大なケージの中に放し飼いにし、自力での餌捕りや巣作り、産卵を訓練させる大規模施設を新潟・佐渡島内に新設する方針
▼▼▼環境省方針▼▼▼
を決めた。今年度中に着工する。訓練期間は二年を予定し、適応状況を見ながら平成二十二年にも放鳥を始める予定で、薄紅色の羽れが再び日本の空を舞う姿が期待できそうだ。

佐渡島で三十六年間トキを見守り続けていた元佐渡トキ保護センター長 近江宏博さん「野生復帰は緊急課題でも難しい。トキが長く住めるよう水田の水張りの農業使用の自衛 森林の確保など、地方が一体となって取り組んでいきたい」

環境省はまた、鳥インフルエンザのような感染症の流行で再び絶滅する恐れがあるとして、現在の佐渡トキ保護センター(佐渡市)以外での分散飼育を実施する。この二本立ての計画で、安定繁殖のため、ケージ内の立ち入りや種力制限する。これらためトキの個体数増と野生化を目指す。訓練施設は、縦五十五メートル、高さ十五メートルの金網で囲った巨大ケージなどからなる。佐渡トキ保護センターはトキの保護と人工増殖を目的としているため、新たな野生復帰のための施設が必要と判断した。訓練施設は保護センターに近い山間部に建設予定。トキの餌になる下草やカエルが生息する水田や草むらがる里山の環境をそのまま利用し、自然の生態系に慣らす。人間との接触を避けるケージで暮らす場合もある。

佐渡島で三十三年間トキを見守り続けていた元佐渡トキ保護センター長 近江宏博さん「野生復帰は緊急課題でも難しい。トキが長く住めるよう水田の水張りの農業使用の自衛 森林の確保など、地方が一体となって取り組んでいきたい」

環境省は、国内で絶滅した種を再び繁殖させていく。今後絶滅するトキを含め、繁殖期つがい以外から順にケージに放す。ベアができれば、施設に隣接する繁殖のため、別のケージに移し、自力で巣作りや産卵、子育てをさせる。繁殖につなげる。一方、鳥インフルエンザなどが佐渡トキ保護センターで蔓延した場合もある。

朱鷺の舞う日 — 村本義雄氏賛 —

松浦 哲 羽 昨

あ、能登に朱鷺の舞う日の還り来る 村本翁の執念みのる
 世の激変に翻弄さるは人のみならずと鳥類保護に生涯捧ぐ
 若き日に朱鷺に魅入られたる人は昭和激動を一筋に生く
 大言壮語と揶揄されつつも己を信じこの新春にはじけたる夢
 所詮幻と揶揄して夢をおとしめし人々この報如何に思える
 深更まで語り止まざる熱き思い村本翁の新春の耀う
 「ニッポニア・ニッポン」出版に語りし熱きゆめ今遂に叶わむとする
 逆風の中壁あれば壁をひとつずつ克服してゆきし人 日本男子
 朱鷺の運命に悲泣せし人遂に立つ村本翁はくこの誇りよ
 能登に再た朱鷺翔ぶ日まで生きなむか亡き夫も恋いし朱の翼見む

(新歌人社 平成十六年三月号より)

初めて隣県で巢作り確認

NPO法人・日中朱鷺保護協会の村本義雄会長(セシ) 羽昨市上中山町は、このほど東京で開かれた山階鳥類研究所の今年度東日本地区賛助会員の集いに出席し、席上、中国における野生のトキの繁殖状況や県内での飼育に向けた今後の取り組みなどを説明した。

中国のトキ

め、関係者ら百十六人が出たものの、野生のトキは今席した。村本会長は、野生 季初めて隣の城固県での巢のトキの唯一の生息地であ 作りが確認され、繁殖地がる中国陝西省洋県での繁殖 拡大していることを報告し

羽昨の村本さん報告

東京で山階鳥類研究所の集いに触れ、施設内で飼育されていたトキは高病原性鳥インフルエンザの感染防止対策として山奥地に隔離され



巣ごもりするトキの親子。今季初めて繁殖地を隣県に広げた＝2001年5月12日、中国陝西省洋県（村本さん撮影）

が継続する中国への支援活動を整えないとトキは生き動を伝えた。村本会長は「いいことはできない」と「国民一体で自然を守る体話した。」

▲平成 16 (2004) 年 3 月 6 日北國新聞

村本義雄氏と日本中国朱鷺保護協会の連絡先は以下の通りです。

NPO 法人 日本中国朱鷺保護協会
 事務局
 〒 925-0011
 石川県羽昨市上中山町レ - 8
 TEL/FAX 0767-24-1351
<http://www.tokihogo.gr.jp>

書評

アオバトのふしぎ

著者：こまたん 税込価格：¥1,680（本体：¥1,600+ 税5%）

発行所：（資）エッチエスケー サイズ：四六判 / 240p

ISBN：4-902424-00-2 発行年月：2004.4

事務局 箕輪 多津男
副会長 染谷 優児

アオバトは、緑色をした大変美しいハトであるが、生息場所が限られていることもあり、一般的にはやや珍しい鳥、あるいは希少な種という印象を持たれているようである。

本書は、このアオバトに魅せられ、その生態の不思議に迫ろうと日夜活動を展開している「こまたん」のメンバーによってまとめられた、長年にわたる調査活動の結晶とも言うべきものである。

ちなみに「こまたん」とは、大磯町にある高麗山など“こま”と呼ばれる地域の周辺で採鳥会を行っていたことから名付けられた、いわばグループ名である。ただし、このこまたんには会費や会則が無く、また代表者も特定しておらず、催しに参加した人はすべて仲間ということで、大変オープンな組織？と見受けられる。

「こまたん」がアオバトに強く結びつくようになった最初のきっかけは、山や森林に棲むアオバトがなぜ大磯町の照ヶ崎の磯に海水を飲みに行っているのか、その謎に迫りたいという思いにかられたということのようである。

そこから、照ヶ崎を訪れるアオバトの時間帯ごとの個体数やその季節変化、移動ルート、海水吸飲時の行動など、一つ一つ調査を進めながらデータを集めていく。同時に、他の地域においてもアオバトが海水などを飲むことがあるか、あるいは他のハトの仲間でもこうした行動が見られるかなど、全国的なアンケート調査を実施する。さらには、アオバトの季節ごとの食性、営巣場所や繁殖生態、羽毛の状態、消化管の様子についての調査、亜種の分布や過去の記録に関する文献調査、タイプ標本を保管するライデン博物館との交渉に至るまで、その活動内容は留まるところを知らない。

そして、その行動力を裏づけているものが、素

朴な好奇心と探求心であると思われるところに、読者は自ずと共感を覚えるに違いない。

それから、こうした様々な調査結果から得られた新たな知見もさることながら、それ以上に魅力的であるのが、調査を実施する際のメンバーの基本的な姿勢である。

本文の終わりのところで、「こまたん」の調査法には、二つの自然観察の基本原則が貫かれていることが紹介されている。すなわち、

1. 野鳥と距離を置いて優しい気持ちで調査を楽しむ
2. いろいろな人との交流の中で調査を楽しむ

という二点である。

20年以上に亘るこれまでの「こまたん」の活動に参加した人は、名簿にすればおそらく千名を超えるとのことで、その活動の広がりや継続性、そして情報交換のために築き上げられたネットワークの大きさの源は、まさにそうした誰もが共感できるような活動の姿勢にあるものと思われる。

何事も、まずは楽しむこと。だからこそ夢中にもなれるし、長続きもするし、仲間の輪も広がるのであろう。愛鳥教育活動の展開にあたって、基本はそこに置くべきであると痛切に感じる次第である。

本会会員で「こまたん」の一員として活動しておられるのが小野肇氏である。小野氏によると

『私自身は2年ほど前からこのグループに入っているのですが、2002年の丹沢堂平アオバト繁殖調査以来、この不思議な鳥アオバトに嵌ってしまい、夏になると大磯照ヶ崎海岸に出か

けてアオバトの幼鳥調査をしています。この本の中で、口絵写真の中の「サワグルミに止まるアオバト」と「アヒルのような嘴をした雛」は、丹沢の調査の時に、私がデジカメで撮った写真を採用してもらいました。また本文の中では、197ページに「鉄人2号」の名前で私のことが出てきます。

この本は、大手の出版社から出たものではないので、本屋さんの店頭には並ぶということではなく、「地方・小出版流通センター取扱品」ですので、近くの書店で取り寄せていただくこととなります。

(※「エッチエスケー」でも直接扱ってくれるようである。詳しくは「こまたん」「エッチエスケー」のホームページをご覧ください。また、主要なインターネット上の書店でも取り寄せではあるが、購入できるようである。)

本の中にも書いてありますが、「こまたん」ではアオバトの情報を広く求めています。ちょっとしたことでもけっこうです。アオバトに関する情報がありましたら、私宛にメールをいただくと助かります。

hajime_ono_e@k12.tamagawa.ed.jp】

とのことである。

なお、本書を発行しているエッチエスケーの代表は、以前、文一総合出版において『BIRDER』の編集長をしておられた原田雅之氏であり、今回が新たな出版活動の第一段ということである。同社の今後の動きにも大いに注目していきたい。

こまたん

<http://www.komatan.jp/>

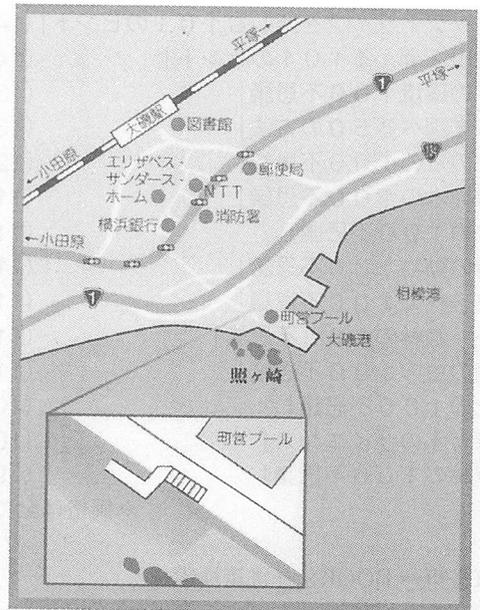
(資) エッチエスケー

〒359-1152

埼玉県所沢市北野 755-1

TEL/FAX 04-2948-4580

<http://homepage3.nifty.com/praoonhsk/>



▲照ヶ崎海岸地図 (本書カバーより転載)

書評

森の野鳥を楽しむ 101 のヒント

著者：日本林業技術協会編 税込価格：¥1,470（本体：¥1,400）
出版：東京書籍 サイズ：B 6判 / 230p ISBN：4-487-79965-1
発行年月：2004.3

桐原（森）真希

東京農業大学在学中、初めてこのシリーズの「森の動物の100不思議」を読んだのですが、内容の分かりやすさや、その読みやすい構成から、とても印象深く心に残った本となりました。

その後も、森や木に関する「100不思議」シリーズ、「101ヒントシリーズ」が次々と出版され、あれも読みたい、これも読みたいと思っていました。

そんな時、鳥仲間の友人から「執筆しませんか」と声をかけてもらったのがきっかけで、夫婦そろって製作に参加することに。まさか、自分達がこのシリーズにモノを書くことになるうとは、全く予期していなかったもので、大変驚きました。

この本は、どこから読んでも、すぐに読み切れる1テーマが見開きで紹介され、イメージがつかみやすいのも売りです。「野鳥を知る」「野鳥から学ぶ」「野鳥をまもる」「野鳥を調べる」「野鳥とともに」の五つのセクションに分けられ、鳥が好きな方もそうでない方にも、生き物の不思議や感動がさらに深まる1冊です。

また、シリーズの姉妹版もお薦めです。

- 「森の野生動物に学ぶ101のヒント」 (1400円)
- 「森に学ぶ101のヒント」 (1400円)
- 「ウディライフを楽しむ101のヒント」(1400円)
- 「里山を考える101のヒント」 (1400円)
- 「森の環境100不思議」 (1300円)
- 「森を調べる50の方法」 (1300円)
- 「きのこの100不思議」 (1200円)
- 「森の木の100不思議」 (1165円)
- 「木の100不思議」 (1165円)
- 「森の動物100不思議」 (1165円)
- 「熱帯林の100不思議」 (1165円)
- 「続・森林の100不思議」 (1165円)
- 「森の虫の100不思議」 (1165円)
- 「土の100不思議」 (1000円)
- 「森と水のサイエンス」 (1000円)
- 「森林の100不思議」 (981円)

※価格は全て税抜き



東京書籍→BOOKS→書籍検索

<http://www.tokyo-shoseki.co.jp/book/index.html>

から書名を入力することで出版社の詳細情報にアクセスできます。

会員の皆さまへのお知らせ

電子メールによるニュースレター配信について

全国愛鳥教育研究会常務理事会

本会では、これまで、機関誌「愛鳥教育」を通して、会員の皆様方に、愛鳥教育に関する情報の提供を行ってきました。しかし、年3回の機関誌発行では、様々な情報を皆様にタイムリーに提供することが必ずしも十分にはできていなかったと思います。これまでも、機関誌発行までに行われる研修会のお知らせなどは、ハガキ等を使って周知するように心がけてきました。しかし、今後も同様のサービスを行うことは、本会の財政状況からも難しいと思われま

そこで、本会では、電子メールによるニュースレターの配信を不定期に行うことといたしました。これにより、今まで機関誌「愛鳥教育」の発行に間に合わず掲載できなかったイベントについての紹介ができ、その他の愛鳥教育に関する様々な情報の迅速な提供も可能になると思われます。具体的な内容としましては、現在のところ、研修会・イベント・書籍紹介等のお知らせを考えております。

配信を行うメールは、PC利用を前提としたものとします。携帯メールについては、字数制限や添付ファイルのサイズなどの予測を立てにくいことから、現時点では、対象といたしません。将来的には、考慮したいと考えています。

なお、個人情報となるメールアドレスの管理は厳重に行います。また、登録されたメールアドレスは、本会ニュースレター発行以外には使用いたしません。

以上のことを踏まえ、ニュースレターの配信をご希望なされる会員の方は、下記の手順にて配信手続きをお願いいたします。

○ニュースレター配信手続きの手順

1. 担当常務理事 堤 達俊 (t-bird@nifty.com)宛に、メールをお送りください。

件名には、「愛鳥教育ニュースレター希望」とお書きください。

本文には、会員名をお書きください。

2. 折り返し、確認メールをお送りいたします。

1週間たっても確認メールが来ない場合は、お手数ですが、再度メールにてお問い合わせください。

手作業によるメールアドレス登録ですので、多少お時間がかかる場合もあるかもしれませんが、その節はご容赦ください。

○配信停止の手順

配信停止をご希望の場合は、上記アドレスまでご連絡ください。確認の上、配信停止手続きを行います。

第5回 環境教育研修会 in YOKOHAMA

～小学校教職員のためのバードウォッチング講座～
『ツバメから始める総合的な学習』

「学校に来るツバメを生かして、
総合的な学習を始めたいのですが。」

「4年国語の『ツバメのすむ町』の
フィールドワークってどうやるの？」

そんな先生方、是非ご参加ください！！

- ◎日 時 平成16年5月16日(日) 9:30～12:00
(雨天決行)
- ◎会 場 横浜市立恩田小学校(横浜市青葉区)
- ◎参加費 500円(資料代・保険料等)
- ◎持ち物 筆記用具・あれば野鳥図鑑、双眼鏡など
- ◎交通 東急田園都市線 青葉台駅下車後 バス10分乗車
市営バス 118系統 田奈高校前下車徒歩5分
東急バス 日体大行き 田奈高校前下車徒歩5分
- ◎内容 実際に、営巣・子育て中のツバメを観察しながら、子どもが観察する際の留意点・効果的な観察方法等について研修をします。
その後、室内にて、ツバメを生かした総合的な学習の実践例の紹介をします。
初心者大歓迎。環境教育・国際理解教育にもつながる、子どもが主体的に活動できるプログラムをご紹介します。
- ◎主催 全国愛鳥教育研究会
- ◎申し込み 5月14日までに、電話かメールでお申し込みください。
TEL: 042-791-6689
(PM7:00以降 堤)
e-mail: t-bird@nifty.com

平成 14 年度 収支決算報告

事務局 箕輪多津男

【収入の部】		(単位：円)
項 目	決 算 額	
会 費	471,000	
売 上	5,000	
寄 付 金	5,600	
受 取 利 息	9	
前期繰越収支差額	318,478	
収入合計	800,087	

【支出の部】		
項 目	決 算 額	
会誌発行費	410,000	
通信運搬費	107,100	
会 議 費	625	
事務消耗品費	10,972	
雑 費	1,000	
連盟支払金	5,000	
次期繰越収支差額	265,390	
支出合計	800,087	

前期繰越収支差額	318,478
当期収支差額	-53,088
次期繰越収支差額	265,390

上記の通り報告いたします。

平成15年3月31日

会 計 染 谷 優 児
事務局 箕 輪 多津男

監査の結果上記の通り相違ないことを認めます。

監 事 徳 竹 力 男
監 事 井 口 豊 重

編集後記

「第4回 環境教育研修会 in YOKOHAMA」では、「餌付け」を単に「いけないこと」と決めつけるのではなく、餌付けの心理にまでさかのぼって体験的に考察することで、より深い指導を目指すという取り組みに、参加者一同興味深く取り組むことができました。

堤氏も触れていたように、三ツ池公園を活用する会の松田照之氏には、本会の趣旨に賛同いただくと共に、長年にわたる観察に基づく鳥たちの動静と餌付けとの関連について、親しくご指導いただきました。

菓山香里氏には、からかわいらしいドングリキンクロの詳細な工作法について新たに書き下ろしていただきました。

この場を借りて、改めて両氏に感謝申し上げる次第です。

もりまき通信では、帰化生物についてご執筆いただきました。子供のころの原体験という観点からも看過できない問題であると改めて思いました。

「アオバトのふしぎ」は、文字通りこの鳥の生態のふしぎに加えて、この本が成立するに至る背景も大変に興味深いものです。ぜひお読みください。(染谷)

愛鳥教育 No.70

平成16(2004)年4月30日

発行人 杉浦嘉雄
発行所 全国愛鳥教育研究会
住 所 〒104-0061
東京都中央区銀座2-10-11
八田ビル4F
NPO 法人環境学習研究会内
電 話 03-3547-1650
FAX 03-3547-1650
会 費 3,000円
郵便振替 00180-7-12442
印刷所 祐文社